

令和元年(2019 年)5 月 16 日(木)から 18 日(土)にかけて、フィリピンで行われた SPC 国際教育者会議に出席して参りました。カトリック信者が国民の大多数を占めるフィリピンでは、仙台白百合学園の設立母体でもあるシャルトル聖パウロ修道女会（The Congregation of the Sisters of St. Paul of Chartres = SPC）所属のマスール方が、教育や、医療・介護、社会福祉の面で非常に精力的に活動しています。今回のフィリピン訪問で一番強く印象に残ったのは、フィリピンのマスール方の朗らかさと行動力、そして、カトリックの精神に基づいて社会を良くしていこうとする思いの力強さでした。

SPC が設立母体となっている学校は、大学や高校など非正規の支援学校まで含めてフィリピン国内で 40 校以上あり、そこで働くマスールや教職員、またそれ以外の学校教育に携わる人々が、年に一度開催されるこの教育者会議に出席するのだそうです。今年度の参加者は、全部でおよそ 600 人余りになったとうかがいました。日本からは、函館、仙台、湘南、八代の各白百合学園中高、また仙台白百合女子大や東京の白百合女子大からの 8 名と、フィリピン研究をされている立教大の先生 1 名、合わせて 9 名が参加しました。その他、インドネシア、ベトナム、タイからも教育活動を行っている SPC のマスール方も出席していました。



【会議のテーマとシスターたち】

2019 年度の SPC 国際教育者会議のテーマは、“Journeying in Intentional Discipleship”(「自らの意志でキリストの弟子として旅をすること」)でした。“Journeying”「旅をする」とは「人生を生きる」ということの比喻だとすぐに想像できる言葉ですが、“Intentional Discipleship”「自らの意思でそうなることを選んだ、主体的な、キリストの弟子であること」という言葉は、あまり耳にすることのない表現です。今回の会議期間中、講演者の方たちは、SPC シャルトル聖パウロ修道女会の学校で教育に携わる私たち教員全員が、理解し学び身につけてほしい概念・キーワードとして、この“Intentional Discipleship”という言葉は何度も何度も繰り返しそれぞれのお立場から解説していらっしゃいました。

会議中、フィリピン管区の管区長シスター・リリアをはじめ、講演者の方々に先立ってステージでご挨拶をなさったシスターたちは、カトリック教育、聖パウロに習うシャルトル聖パウロ修道女会の教育が目指すものや存在意義について、熱心にお話しされました。若い人々が日々の祈りを通してキリストの教えを学び、キリストの弟子として自らの意志で社会に奉仕しリーダーシップを発揮することのできる人々になるよう導いていきましょう、また、若い人々の悲しみを理解し喜びを分かち合い、若い人たち自身に自分が本当に望むものに気付かせ、才能を開花させていく手助けができるようになりましょう、そして、カトリック教育の教育者として教員自身が自ら意志的にキリストの教えに学び倣うキリストの弟子になりましょう、と参加者に呼び掛けていました。信仰に対する篤い信頼や次世代の教育に寄せるはっきとした抱負と熱意が、ステージ上で語るマスールたちの言葉から伝わってきました。カトリックのミッション・スクールが「人を育てる」という点で本来持っている強みがこれなのだな、と感じました。

同時に、その信仰にかかわる話が決して押しつけがましくなく自明の理として語られることや、理知的に社会にかかわっていこうとする生き方や読書に裏打ちされた知識が宗教的な態度につながると考えられていることが印象に残り、フィリピンというカトリックの教えが深く根付いた風土を感じました。日本で普通に生活をしていると、白百合で教員をしていてさえ、なかなか聞く機会のないタイプのお話でした。フィリピンのマスール方が、本当に心の底からカトリックの理想をよいものとして信じ、それを追い求めるために世俗の生活を捨てて、修道女として学びながら、自分たちの生涯をかけて教育に携わっている、ということが心で納得できました。マスールたちがフィリピン社会で深く尊敬されている理由もわかるように思いました。



【訪問先について】

会議の前後に、ルイ・ショーヴェ神父ファウンデーション・スクールと、マニラ近郊のアンティポーロにある修道院の管区本部とその近くのタウィタウィ・エクステンション・スクールを訪問しました。ルイ・ショーヴェ神父ファウンデーション・スクールは、マニラの貧困地域の子どもたちへの教育を目的に SPC のシスターたちが設立した学校です。2010 年 1 月にフィリピン・ボランティア・スタディツアーの生徒の引率で訪れたときは、貧困地域の子どもたちが将来自ら働いて生活していくことができるように、衛生習慣や生活マナー、英語を含む基礎学力を身につけさせているだけでなく、幼い子どもたちが安定した生活環境で暮らせるようにその保護者達への職業技能訓練も行っているという点が、とても強く印象に残った学校でした。9 年の時を経て今回再び訪れてみると、小学校低学年以下の子どもを受け容れていた平屋の校舎は、建て増しされて高校生までが学ぶことのできる 4 階建てになっていました。高校生へと成長した子どもたちの中には、優秀な成績で奨学金を獲得し、大学への進学を果たす生徒も多いそうです。その結果、その優れた教育内容が政府からの表彰を受けたということでした。現在ルイ・ショーヴェ神父ファウンデーション・スクールの校長を務めているらっしゃるマスールは、「教育を通して、子どもとその周囲を変え、社会を良い方向へ変えていくことができるのです」と力強くお話してくださいました。

アンティポーロの修道院管区本部に近いタウィタウィの学校は、台風で被災した貧しい人々の避難地に設立されてまだ数年だということでした。車が通れない急勾配の滑りやすい泥の坂を歩いて上ると、設備の乏しい小さな校舎が鬱蒼と茂った木立の間に立っていました。その小さな建物の中で、大きな目をキラキラさせた幼い子どもたちや、子どもたちのために一生懸命に活動している少女のような年若いマスールたちの姿を見て、今は立派な学校になったルイ・ショーヴェ神父ファウンデーション・スクールも、始まりはこのようであったのだらうと思いました。そしてそこから、300 年以上昔のフランスで、ショーヴェ神父とそのお考えに従った少女たちが創り出そうとした「学校」の精神が、現代でもこのようにして引き継がれているのだ、と気付いて心が大きく動きました。

「教育を通して、子どもとその周囲を変え、社会を良い方向へ変えていく」という修道会の精神は、修道会が日本に渡ってきて初めて活動を始めた函館でも、そしておそらく仙台でも、脈々と受け継がれてきたのだと思います。フィリピンで私が見たのは、今この時も、その修道会の精神を引き継いだ少女・女性たちが社会をよりよくするために弱い立場の人々に寄り添い働いている姿でした。仙台白百合学園も、その修道会の精神を受け継いだ学校です。この学園も創設以来、さまざまな形で人と社会に奉仕しリーダーシップを発揮できる女性を育てようとしてきました。SPC 国際教育者会議に参加させていただいたことで、学園の精神の原型に近い何かを実際に目にして学ぶことができたように思います。学園の教師の一員として、この仙台白百合学園の生徒一人ひとりが、学園で学ぶ過程で修道会で受け継がれてきたその精神に触れ、それぞれが持って生まれた才能を生かして社会に貢献する大人に成長していく手助けしていきたいと強く思っています。

タウィタウィ・エクステンション・スクールの教室です。
子どもたちが歓迎会を開いてくれました。



Sendai Shirayuri Gakuen (High School)
Thank you Very much と書かれたポスターがありました。



タウィタウィ・エクステンション・スクールの近くまで
車で行くと、みんなが道路で歓迎をしてくれました。